■解答乱麻■

子らに日本の「宝」贈りたい

参院議員 山谷えり子

〈やまたに・えりこ〉サンケイリビング新聞編集長、国務大臣（国家公安委員長・拉致問題担当相）など歴任。1男2女の母。

今年は丙申、果実が実りの時を迎える年回りといわれている。60年前の昭和31年を振り返れば、神武景気で経済白書には「もはや戦後ではない」と記され、街には流行歌「ハートブレイク・ホテル」「ケセラセラ」が流れ、日本の国連加盟が承認されるなど、戦後復興が明確に示された時期であった。

「去年今年貫く棒の如きもの」（高浜虚子）の句があるが、年を重ねるにつれ、私は、貫いている〝棒〟とは、〝脈々たる先人の生命〟ではないかとの思いを深くしている。孫と羽根つきやかるたに興じれば、幼児であった自分のまわりの大人の笑顔がありありと思い出されるのは何という幸せであろう。

「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」（西行）、「たふとさにみなおしあひぬ御遷宮」（芭蕉）と詠まれ、歌われた伊勢神宮は、昨年も800万人以上が参拝した。

日本書紀を紐解けば、伊勢の「天照大神」は我が国に降り立つ孫のニニギノミコトに、心美しく稲の実り豊かな国づくりをしてほしいと稲穂を託された。

また、ニニギノミコトのひ孫である初代神武天皇は、奈良の都で建国の理念「橿原奠都の詔」を発せられたとあり、一人一人が大切にされる国、徳のある国、世界中が家族のように平和に暮らす国をつくりたいとのお心が読み取れる。これは現代日本の国柄として生き続けているように思う。

正月は家庭や地域で、行事を通して、子供らに日本の宝を贈る季節である。60年前を「神武景気」と名付けた先人の心は底の浅い利益至上主義ではなかったであろう。暴力的過激主義の広がりも心配される世界で、「日本の品格」を発信することは世界平和への貢献という使命にもつながると信じている。

祖父母の家に年賀に行けば、「数え年齢はいくつ？」と尋ねられたものだった。満年齢より1年分多い数え年齢を大切にしていたのは、胎内で歳神様と共にあった時を忘れぬようにとの、日本人らしい生命観に根ざしたものであったろう。「20代遡れば百万人のご先祖さまがおられるんだから、ひがんだり怠けたりは恥ずかしい。朗らに一年暮らそうね」と言われて貰うお年玉は格別なものがあった。

日本は百年、千年と辿ることができる文化の国である。いろいろな民族、国があり、易姓革命のようなことをしてきた国もあり、辿りづらい国が多い中で、日本の場合は脈々たる伝統、文化の中に生かされている幸いをかみしめながら、このお正月も近所の子供たちと歌い初め会で「一月一日」の歌を朗々と歌い、「この里に手まりつきつつ子供らと遊ぶ春日は暮れずともよし」（良寛）と書初めし、合気道のお稽古始めをし、日本文化が子供たちの教育の現場で継承されるよう献身したいと願った。

4年後のオリンピック・パラリンピック東京大会は、五輪憲章にも謳われているように、スポーツを文化、教育と融合させて、生き方の創造につながるよう尽力していかなければならないと考えている。

さて、本年5月には伊勢志摩サミットが開催される。平成25年の第62回式年遷宮に私も参列し改めて感嘆したことは、持統天皇の時代から1300年にわたって20年ごとに新宮を造って祈り続けた国民の稀有な清らかさであった。脈々とつなぐことと、常に新しい〝常若の国〟であることの両立は容易ではないが、千年一日の如く成し遂げている日本のしなやかな強さ、深さを是非とも国内外に発信していきたいものである。